

使徒の働き2章22－24節 「主ともキリストともされたイエス」

1A ナザレ人イエス

2A 不思議としるし

1B 神からの方

2B ヨナのしるし

3A 十字架 23

1B 神のご計画と予知

2B 苦痛と辱め

1C 罪の対価としての死

2C 罪から来る恥

4A 死からの解放

1B 神の御子

2B 正しい方

5A 救われるために

1B 悔い改め

2B 信頼

3B 主の告白

本文

主は、よみがえられました！ 私たち教会の行事として知られているのは、クリスマスとイースターです。クリスマスは、イエスがお生まれになったこと、そしてイースターはよみがえりです。イエスが神であるけれども、人として現れたことをクリスマスは記念して礼拝し、イースターは、イエスが 30 歳そこそこの時に、十字架刑で死なれたのに、三日目によみがえられたことをお祝いします。希望は、すべてこの復活にかかっていると言っても過言ではありません。

弟子の一人、ペテロがイエスを宣べ伝えた、説教をした一部を読みたいと思います。使徒の働き 2 章 22-24 節です。「²² イスラエルの皆さん、これらのことばを聞いてください。神はナザレ人イエスによって、あなたがたの間で力あるわざと不思議としるしを行い、それによって、あなたがたにこの方を証しされました。それは、あなたがた自身がご承知のことです。²³ 神が定めた計画と神の予知によって引き渡されたこのイエスを、あなたがたは律法を持たない人々の手によって十字架につけて殺したのです。²⁴ しかし神は、イエスを死の苦しみから解放して、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、あり得なかったからです。」

ペテロは、イエスがこのようなことをした経緯から、「神が今や主ともキリストともされたこのイエ

ス」と呼びました(2:36)。私たち日本人にとって、神を信じることについては、あまり大きな困難を覚えません。自然に対する畏敬があり、自分を越えたところにある存在があることは、何となく多くの人が感じているからです。けれども、イエスを信じるということになると、大きな障壁をよじ登るような思いがします。なぜイエスなのか？ということなのです。しかし、聖書を読むと、そこが分かります。その神ご自身が、天と地を造られた方が、イエスをキリストにし、主としたからです。キリストとは、世を救う方、救世主のことです。そして主とは、すべてのものの中心であり、従わなければならない存在です。イエスを、世を救う方、主とされたというのです。そこで、ペテロが語った、一つ一つの、イエスについてのことを見ていきましょう。

1A ナザレ人イエス

初めに、「神はナザレ人イエスによって」と言っています。ナザレというのはイスラエルにある町の一つです。そこ出身のイエスということです。イエスは、ユダヤ人の中では多くある名前でした。ですから、なおのことナザレのイエスだと言って、他のイエスと混同しないように語りました。

ここで大事なのは、イエスが歴史上の人物だということです。歴史上の實在の人物ということだけでなく、世界的に最も有名な、歴史上の人物だということです。そして聖書に書かれていることも、歴史の中で起こったこととして、受け入れられています。聖書は歴史書であります。

日本において、この事実さえ知られていないことが多いです。私がある時に、驚いたことがあります。イスラエルに、教会の仲間を率いて旅行に行きました。そこで神殿の丘と呼ばれるところに入るために、列になって待っていました。すぐ隣に、同じようにして待っている日本人のグループがありました。そこで初老の男性がつぶやいていました。こんなのを信じているなんて、ばかばかしいということをつぶやいているのです。私は驚きました。その待っているところには、二千年前のローマ時代の石や壁が、掘り起こされていて、まるで映画のロケでもやるのかというぐらいに、当時の姿をそのまま掘り起こし、整備されているのです。問題は、事実を知りたいのではなく、自分の先入観の中で生きていきたい、その考えを変えたくないという頑なさです。

織田信長をみなさん、歴史上の人物ではないと言ったらどうでしょうか？聖書は、古事記か日本書紀のように神話であり、イエスも神話的な存在だという偏見が日本人の一部にいますが、それは織田信長を神話的人物だとするぐらい愚かなことです。なぜ織田信長が生きていたと言えるのでしょうか？安土城の跡があるし、あまりにも膨大な歴史的史料が遺されているからです。もし日本から一歩でも出て、織田信長の話をしたら、知っている人はほとんどいません。しかし、日本から一歩出て世界を巡ったら、イエス・キリストについて知らない人はいないのです。そして、織田信長以上に、歴史的人物として認められているのです。

そして聖書であります、そこにイエスがよみがえったことが書き記されています。聖書にしか

書かれていないのであれば、それは宗教書であるから客観性がないという人がいます。ずっと後に書かれて神話になったのだらうとも言います。いえいえ、イエスがよみがえったことを記録している新約聖書について、実際のことが起こって 30 年前後のうちに書き上げられています。今年は、オウム真理教による地下鉄サリン事件が起こって 30 年です。地下鉄サリン事件を架空の話としてでっち上げることは、不可能ですね。あまりにも膨大な写真や映像、そしてまだ生き残っている証人が数多くいるからです。そのような時に書かれていますから、神話になりようがないです。

2A 不思議としるし

1B 神からの方

次にペテロは、こう言いました。「**あなたがたの間で力あるわざと不思議としるしを行い、それによって、あなたがたにこの方を証しされました。**」数々の力あるわざ、不思議としるしを行われ、それでこの方が単なる人ではなく、神からの方であることを示していかれたのです。悪霊を追い出されました。病人を即時に癒されています。生まれつきの盲人の目を開かせました。そして、水の上を歩かれました。そして、死人をよみがえらせました。ラザロという人は、四日間、墓に葬られていましたが、イエスは「ラザロよ、出て来なさい」と大声で叫びました。そうしたら、布が巻かれたまま出て来たのです。

聖書について、また神やキリストについて、多くの人が疑問に思います。その大きな一つは、奇跡です。あまりにも、ありえないことが数多く起こっていることについて、これは信じられないと思うのです。例えば、イスラエルの民が紅海を渡る時に、海が二つに分かれて、その乾いたところを渡りました。ヨシュアが率いるイスラエル軍が、カナン人の王たちを追っている時に、太陽が留まり、日没が来るのが遅れました。そして、イエスは処女マリアから生まれ、そして死んだのに、けれども、もし私たちが合理的に説明できることだけが聖書に書かれていたら、神を信じる必要はあるのでしょうか？そこに書かれている神は、私たちの人間の理解できる神であり、また私たち人間のできることしかできない神になります。そんな神を信じて、拝んでどうするというのでしょうか？私たちの理解をはるかに超えた、人間が絶対にできないことを行うことができるからこそ、それが神であり、私たちは礼拝するのです。

あるカトリックの神父さんが、どうやって信仰を持ったかについて証ししていたのを読んだことがあります。それは、彼は聖書にある奇跡について、反論しようとして大学で論文を書いていたそうです。ところが、聖書の奇跡はもとより、聖書に書かれていない奇跡も含めて信じるようになりました。なぜなら、神がおられるという前提であれば、奇跡は当たり前のことだからです。

そもそも、私たちは奇跡と呼ばなくとも、あまりにも当たり前になっているところに奇跡が満ちています。自分の身体が、絶妙なバランスで成り立っていることは、医学の初歩知識があればわかります。人間が決して作れないですし、偶然にできたと考えるのは、あまりにも非合理的です。そし

て天体を見れば、それがあまりにも規則正しい法則で動いていることが分かっています。神はいない、すべては偶然であるとするならば、どうやってこれを説明できるでしょうか？この地球も、絶妙なバランスで、生命体があります。

聖書の始まりは、「初めに、神は天地を創造した」であります。この言葉を信じることができるのであれば、その後の奇跡、そして最大の奇跡である、死者からの復活を信じられるのです。

2B ヨナのしるし

あまりにも多くの奇跡やしるしを見ても、当時の、ユダヤ教の指導者たちは信じませんでした。それでイエスが言われました。「マタ 12:39-40 悪い、姦淫の時代はしるしを求めますが、しるしは与えられません。ただし預言者ヨナのしるしは別です。40 ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、地の中にいるからです。」ヨナという預言者は、クジラのような大魚に呑み込まれ、海底にまで降りて行きました。それでも、三日後に大魚が彼を吐き出し、陸に戻ってきたのです。そのことを取り上げて、イエスは、自分も死に、葬られるけれども、三日目によみがえると宣言されたのです。これが、心を頑なにしている者たちに残された、最後のしるしになるということなのです。

3A 十字架 23

1B 神のご計画と予知

そしてペテロは、言いました。「**神が定めた計画と神の予知によって引き渡されたこのイエスを、あなたがたは律法を持たない人々の手によって十字架につけて殺したのです。**」イエスが、ローマの十字架刑に処せられたのですが、それは、ユダヤ人の指導者たちが、当時の権力者であり、ローマ総督にイエスを差し出して、要求したからです。イエスには、何も罪が認められないと総督は彼らに言いました。けれども、十字架につける圧力をユダヤ側がかけたことによって、政治的な理由だけで、総督は十字架刑にしました。無実な人が、こんなむごい形で死なれました。

けれども、それが「**神が定めた計画と神の予知によって**」とあるのです。ここが、驚くべきことです。そもそも、この出来事について、何百年も前から、いや、一千年以上前から語られていたのです。聖書には、旧約聖書と新約聖書があります。イエスが死なれ、よみがえられたというのは新約聖書に書かれています。けれども、旧約聖書にこの出来事についての話が、数多く出てくるのです。

例えば、紀元前十世紀に生きていたダビデが、こう語っています。詩篇 22 篇から。

14 水のように私は注ぎ出され骨はみな外れました。心はろうのように私のうちで溶けました。
15 私の力は土器のかげらのように乾ききり舌は上あごに貼り付いています。死のちりの上にあなたは私を置かれます。

16 犬どもが私を取り囲み悪者どもの群れが私を取り巻いて私の手足にかみついたからです。

17 私は自分の骨をみな数えることができます。彼らは目を凝らし私を見えています。

18 彼らは私の衣服を分け合い私の衣をくじ引きにします。

十字架につけられている時の身体の状態を、詳細に述べています。そして、自分の衣服を分け合って、くじ引きにしていることも伝えています。これを、十字架につけられたイエスのところで、彼からはがした着物を、ローマ兵たちが行ったことです。だれが、こんなことを自分でしかけることができるでしょうか？これらのことを、ダビデは千年前に語っていたのです。

このように、私たちから見て約二千年前の、十字架の出来事は、ただ偶然に起こった出来事ではなく、予め語られていたことであり、そこに神がおられること、それを計画して予定しておられたことを見ることができます。そもそも、前もって語られていた宗教の指導者はいるのでしょうか？仏陀は前もって語られていません。イスラム教のムハンマドも語られていません。キリスト教は違うのです。後になって、弟子たちがイエスを神としたという説明が、日本語の本にはありますが、滑稽です。前もって語られているのですから、そこに神の証明があるのです。

2B 苦痛と辱め

そして、なぜイエスが罪を犯していないのに、そんな目に遭わないといけないのか？と思いますね。今でも覚えています、ある美術館で西洋絵画の特別展が開かれているところに、十字架につけられたキリストの絵画がありました。それをある日本人の若者が、「これが、キリスト教では救世主だっていうことだよ。」とちょっと笑いながら語っていました。そうなんです、こんな惨めな姿が、なぜ自分を救ってくださるのか、ちょっと情けないというか、愚かですね。

1C 罪の対価としての死

しかし、そのことも、神は予め知って、計画されていたのです。聖書には、人はすべて、神に罪を犯したと、はっきりと言っています。天地を造られ、自分の息も与えておられる神を認めず、背いています。それで、罪を犯した者は死なないといけないと、神ははっきりと言われています。しかし、神は人を愛しておられます。人が滅んでほしくないと願われています。それで、身代わりに死ぬ、いけにえが必要です。神は、キリストを身代わりに死なせることによって、私たちの罪を赦すようにされたのです。紀元前 700 年頃にイザヤが、予め次のように預言していました。53 章です。

4 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った。それなのに、私たちは思った。神に罰せられ、打たれ、苦しめられたのだと。

5 しかし、彼は私たちの背きのために刺され、私たちの咎のために碎かれたのだ。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒やされた。

6 私たちはみな、羊のようにさまよい、それぞれ自分勝手な道に向かって行った。しかし、

【主】は私たちすべての者の咎を彼に負わせた。

2C 罪から来る恥

日本の方々は、自分が神に罪を犯したということは、あまり意識していない方が多いのではないのでしょうか。けれども、恥は分かります。自分がしてしまったことで、負い目を抱えています。これは、やってはいけないことなのにやってしまったというものです。そして、人生の奥隅にしまい込んで、墓場まで持っていこうとします。こうした深い部分を「恥」と言いますね。聖書では、恥は、神によって造られたアダムから始まっていることを教えています。神が食べてはいけないと言われた木から、実を取って食べたので、自分が裸であることに気づきました。それで、神が近づいてきたのですが、恥ずかしくて、恐れて、隠れていたのです。

ローマの十字架刑というのは、二つの目的があります。一つは、簡単に死なせず、激痛の中で徐々に死んでいくようにさせています。手足に釘を打つのですが、その痛みは尋常ではありません。どんな拷問よりも痛いと言われています。しかし、死ぬのは呼吸困難だと言われています。ぶらさがっているだけでは息ができないので、両腕をつかって体を持ち上げます。すると両手に激痛が走ります。そうやって少しずつ殺していきます。

もう一つの目的は、辱めなのです。十字架は、人里離れた丘で行いません。人々が行き交う大通りで行います。そして十字架の高さは、西洋の絵画であるような高いものではなく、人々がその囚人と会話ができるぐらいの高さです。そして、イエスは腰の部分に布が巻かれている絵画がすべてですが、実際は、全裸です。男性の局部もさらされたままです。人は身体の苦痛も苦しいですが、自分の尊厳を剥ぎ取られることも、ある意味でもっと苦しいことです。

こうした辱めを敢えて行うのも、十字架の目的です。それを主は受けてくださいました。それは私たちが神に犯した罪だけでなく、その罪の結果、恥を抱えていることも、すべて覆ってくださるためです。主は、私たちの尻ぬぐいをしてくださったのです。

4A 死からの解放

そしてペテロは語ります。「しかし神は、イエスを死の苦しみから解放して、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、あり得なかったからです。」三日目によみがえったのです。イエス・キリストの生涯は、新約聖書で、なんと四回も語れています。同じ出来事なのに、四つの福音書があるのです。四人の証言と言ってもよいでしょう、少しずつ視点が違いますが、同じことを証言しており、その最後は、イエスが死んだのに、三日目によみがえれたということです。

1B 神の御子

ここで決定的になります。初めの質問です。日本の方々は、神は何となくいるかもしれないが、で

も、なぜイエスを信じることになるのか？ということです。それは、この方が昔、良いことを行った宗教者ではなく、死んだのによみがえった方であり、すべての人にとっての神であり、主であるということです。「ロマ 1:3-4 御子に関するものです。御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、4聖なる霊によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちの主イエス・キリストです。」神の子であり、神ご自身だということです。

私は、親はクリスチャンではありませんでした。一般の仏教を信じている家庭でした。だから、クリスチャンになるというのは、とんでもない決断でした。その時に思ったのです、「あの二千年前に起こったことを、しかも、日本からはるか遠くで起こった出来事のために、私がどうして生涯、いのちをかけて信じていくのか？」けれども、この方が神の子自身であると分かったら、すっと落ちました。二千年前であっても、神であれば、全く関係ないこと。二千年後に生を受けた私のことを思って、十字架につけられた。はるか遠くの日本に生きている私のことを思って、十字架につかれた、ってことは何のこともないのです。

どこに住んでいようか、どの時代に生きていようか、永遠の神のお子は、すべての人のために死なれたのです。そして、そのことを明らかにするために、三日目によみがえってくださいました。そして今も生きています！

2B 正しい方

そして、この方が死んだままでいなかったのは、この方が正しかったことが証明されたのです。この方は罪がないのに罪人とみなされました。けれども、それがご自身のためではなく、私たち罪人のためであり、ご自身はその罪と死に定められることはないことが、ここで証明されたのです。

5A 救われるために

ペテロなど、弟子たちは、自分の罪から救われなさい、この曲がった世から救われなさいと説きました。預言者たちも、そして主イエスご自身も、教えました。私たちが救われるために、どうすればよいのか？

1B 悔い改め

ペテロは言いました。「2:38 それぞれ罪を赦していただくために、悔い改めて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。」悔い改めることです。悔い改めとは、思い直すことです。これまで、神ではなく、自分が中心となって生きてきたけれども、これからは神に向かって生きていくと決めることです。

復活を信じるか信じないかについて、これは知的に同意することではありません。自分の生き方を変えることです。先にお話ししましたが、復活という事実を目撃した弟子たちが書いたのが、この

新約聖書であります。オウム真理教による地下鉄サリン事件が起こったということを受け入れるぐらい、事実ははっきりしています。

いろんな反論があります。けれども、これを目撃した人々は、例外なく迫害され、多くが殉教しましたが、最後まで信仰を棄てることはありませんでした。もし、申し合わせて偽情報を信じているなら、数々の拷問や苦痛の中で必ず自白する人たちは出てきます。けれども、だれもいませんでした。このように、変えられた人生こそ、この方が事実復活したことを証明しています。

復活は知的に困難ではなくて、生き方を変える、悔い改めることなのです。私が同じように、地下鉄サリン事件が起こったことを否定するぐらいなものですよ、と、ある方に話したことがあります。そうすると、「事件が起こったのも、本当は分からないではないか。」と言ってきたのです。どうですか？他のことについては、事実というものを受け入れているのに、こと復活になると、ああだこうだと、あまりにもありえないことを言い出します。言い訳を言っています。それは、もし受け入れたら、自分が自分中心ではなく、神中心に生きなければいけないことを示しているからです。

2B 信頼

そして、ペテロは、「イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい」と言っています。バプテスマとは洗礼のことですが、これは、ただ知的に同意するのではなく、自分の一切を、イエス・キリストにお任せすることを、人々に明らかにすることです。全身、水の中に浸され、それから自ら出てきます。そうやって、キリストの十字架による死と、墓からよみがえったことに、自分は一つになっていますと、身体をもって告白しているのです。

「信じる」という言葉は、いろいろな意味がありますね。知的に同意することもあります。けれども、信頼すると言い換えた方が、聖書にある「信仰」に近いです。こんな話があります。綱渡りの天才がいます。彼は、どんな高い崖であっても、そこにかかっている綱を渡った経験があります。背中に荷物を背負っても、渡ったことがあります。それで、彼が再び綱渡りをしようとしています。そこに集まってきた人々に主催者が尋ねました。「彼は、人を背負って綱を渡ることができると思いますか？」全員が、手を上げました。次に、尋ねます。「では、彼におんぶしてもらいたい人は？」誰も手を上げませんでした。

これが、単に知的に同意することと、自分の身を任せることの違いです。イエスを信じるということとは、後者です。身を任せることです。

3B 主の告白

そして、イエスこそが主であると口で告白します。「イエスが主」つまり、自分の人生の中心はイエスであり、この方を第一にして生きていくと決めることです。